

事業成果報告書

インドコルカタへの研修での玉名地域での報告書

1、現在インドコルカタマザーハウス研修の報告会を
3月～4月にかけて各種団体の理事会や定期総会時及び学
習会の時点で報告をさせていただくように計画を要請して
いる。

各種団体

- ★ 国際交流 水元代表 国際交流ボランティアの視点
で報告会を企画。

集まりがある時点で話し合いよろしくお願
いしますとの連絡

- ★ 玉名市身体障がい者福祉協議会

4月の定期総会で基調報告 「インドでの障がい
者の生活と支援について」 2020年4月25日

- ★ 人権擁護員の集まりでの報告会

希望者として特にハンセン病の人権について

2020年3月

研修成果波及報告書

- ・介護施設内に置いての自立支援の大きな違いの学習会を企画している。2020年2月21日金曜日 18時～
- ・ハンセン病についての権利についての基礎的な研修を企画する。

(写真を実際の映像として 見せる効果を波及させる。)

- ・マザーテレサが世界的にボランティアを毎日50名から100名のみんなに波及している内容を共有する。
(事業所内から行う)

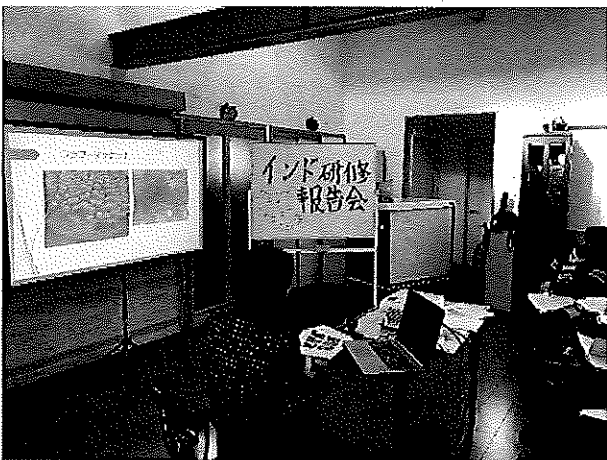
- ・児童の里親制度などの学習会を企画していく。

インド研修報告会

日時 2020年1月11日(土) 13時~15時半

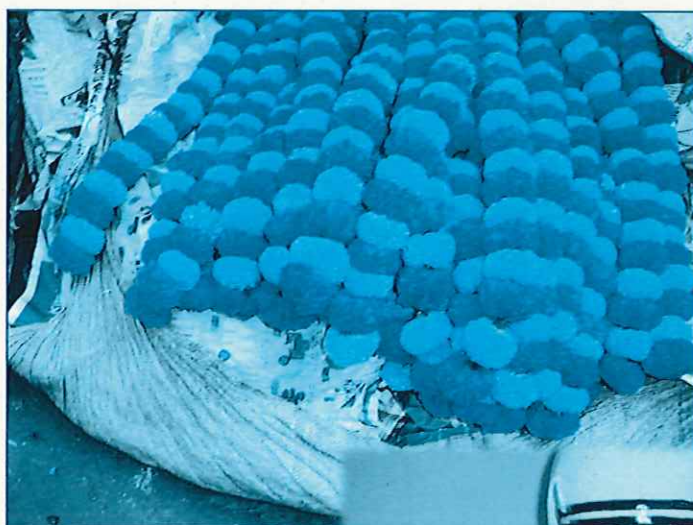
場所 たすけあいの杜

参加人数 20名程度



インド コルカタ

視察研修の旅



27 金
2019年12月20日(金)～12月28日(土)

北本 節代

①インド・コルカタの現状

コルカタはその昔、イギリス支配の中心都市として栄えました。今でも洋風な建物が残っており、その名残を見ることができます。

コルカタは人口 1400 万人。世界屈指の大都市です。カーリガート周辺の人口は 900 万人。その内の 3 割がホームレスです。しかし、インドが 1947 年にイギリスから独立した後、紛争が始まります。バングラデシュやパキスタン、インド農村部からの難民がコルカタに流れ込み、人口が爆発的に増え、路上生活者が増えました。豊かだった街も過密な人口密度（今現在でもデリーより深刻）により、大変な生活環境へと変わっていきました。

- ・宗教は多種多様。外務省の 2001 年国勢調査によると、大きく分けてヒンズー教、イスラム教、キリスト教、シク教、仏教、ジャイナ教の 6 種類が信仰されているようです。その他にも、バラモン教、ジャイナ教等があります。
- ・年間を通して気温が 30 度を超すと言われています。真冬に行きましたが日中の気温は 33 度位。朝晩は 13 度位。寒暖差があり体調管理が、難しかったです。
- ・街を歩くと、車のクラクションと砂埃、どこから来るのか分からない人々で騒々しく、ゴミや犬の糞が散乱しており、驚く状況でした。
- ・CAB（イスラム教を排除する法案）の 2000 人規模のデモがありました。

しかし、コルカタはデモの統制が取れておりニューデリーやデリーに様な暴徒化はありませんでした。・アダール（マイナンバー制度）についてのデモもありました。これがないと医療、教育などが受けられません。

② [死を待つ家] ニルマルヒルダイ

正式名称はニルマル・ヒダイ。ベンガル語で「清い心」という意味。施設は大部屋 2 箇所、男女それぞれ 50 人が収容、合計約 100 名程度。毎日様々な人たちがボランティアとして世界中から足を運んで来ています。

最初の日にはボランティア登録のカード（マザーハウスで発行されるもの）が月・水・金の 3 日間の発行だったため、日曜日は仮の用紙を頂いて師を待つ家まで施設見学へ行かせていただきました。直接ブラザーと呼ばれる男性マザーハウスの方が見せていただく事になっていて、直接施設を訪問、バスに乗り（バス代 8 ルピ）時間 40 分ほど、偶然に日本人で現地の方と結婚されていた方が、丁寧に説明をしてくださいました。

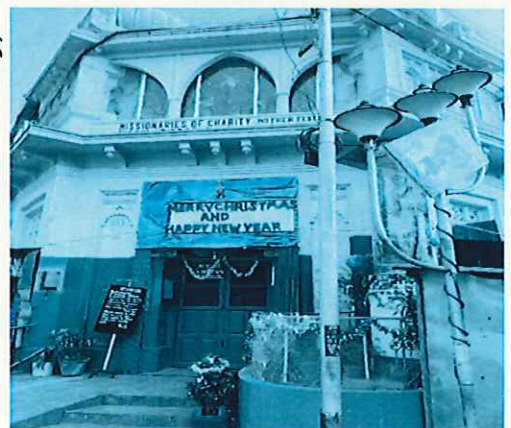
入口のボードには男性収容人数 58 人、女性収容人数 48 人、「死者数 2」と書かれていました。

毎日多くの方が運ばれ、なくなって行かれるそうですが、現在大変になっているのは、行き倒れの方を連れてくると「誘拐罪」になり、施設内で亡くなられている方の書類がそろっていないと「殺人罪になる」ことがあり、それが難しい書類をたくさん作っていくことに現在疲弊していると言われました。

亡くなられて亡くなられた経緯やそのほか沢山の書類を作成することで、幸せなターミナルで看取ると言うことも出来ないことが多いとの説明で、本当になるほどと思いました。

この施設でも残存機能を使うことも大切にさせていることの一つでした。

さらに驚いたことはマザーハウスでの生活は路上生活者の方から見たら天国のようなどころであること、施設もその町の中心にあり、保障されていることが驚きました。



ニルマルヒルダイの入り口

③ プレムダン (Prem・愛の Dan・贈り物)

プレムダンは、カリガート (死を待つ家) より比較的症状の軽い、患者さんが収容されている場所。収容人数は男性・女性各 50 名ほど。

主に結核、肝炎、脳膜炎、マラリア、ハンディキャップ等を持つ患者さん、身寄りがない老人や、貧しくて医者にかかれない患者さんが収容されている施設。知能障害のために家族に捨てられた患者さんもいる。

午前中のみ、ボランティア可能で男女参加可能。ただし女性は女性棟、男性は男性棟に別れなくてはならない。

施設の周囲は駅とスラムも近く、また路上販売などで多数の人が行き来している。そしてボランティアの人達が通ると、現地住人の方は気軽に挨拶を交わしたり、近づいてきて握手を求める子ども達もいた。

施設の入り口は 2 つあり表の主要な道路に面した門と裏の住宅街に面した門があり両方とも頑丈そうな門でコンクリート塀で囲まれていた。各門には警備員がついていた。建物はコンクリート造りで 2 階建て、エレベータは無く、入り口にスロープなどがある。男性棟は 1 棟、女性棟も 1 棟あり、礼拝堂などの建物もあった。男性利用者、女性利用者の区域でわかれており男性ボランティア、女性ボランティアは別れてボランティアを行う。

※施設内は写真の撮影が禁止だったため、室内の写真は無し。

【主なボランティア内容】

・洗濯物を洗い屋上に干す

コンクリートで出来た水槽に洗剤を入れ、洗濯物を水槽に入れ手洗いし、2 度濯ぎ洗いをおこなう。病状が酷くなく動ける利用者が階段に立ち、バケツリレーの形で、屋上まで洗濯物を移動させ、スタッフ、ボランティアが洗濯物を針金で作られた干す場所に掛けていく。量も多く、シーツだけでなく利用者の衣類も含まれていた。

・食器の洗浄

大きい「たらい」を 3 つほど用意し、洗剤を付けたスポンジで洗い、2 つの「たらい」で濯ぎ洗いを行う。チャイの片付け、昼食後の片付けも

プレムダンの流れ	
6 : 0 0	朝の礼拝
7 : 0 0	朝食
7 : 4 0	プレムダンへ移動
8 : 3 0	ボランティア
10 : 0 0	休憩
10 : 3 0	ボランティア
12 : 0 0	終了

同様に行う。この作業は、ボランティアの方が積極的に行っていた。

- チャイの準備し配り、その後の片付け
チャイ作りは、現地スタッフが行ったものをステンレス製のカップに入れて利用者に配る。配る時は利用者が自分で受け取ろうとするので、出来るだけ患者さんに動いて取ってもらうように状況に応じて見守っていた。
- 昼食の準備
チャイの時間に利用したコップを洗い、そのまま利用しフィルターを付けた水道水から飲料用の水をコップに人数分入れ配る。また日によって、果物を出したりするので、皮むきなどの処理を行う。
- ベッドシーツの張替
二人組になり、シーツの交換を行う。一人でされている方もいた。
- 食事介助
外の広場と室内の廊下とわかれての食事介護を行う。患者さんは手で食べる方が多く、食事介助時はスプーンを利用し食べさせていた。
- 髭剃り・肩もみなどの簡単なマッサージ
ボランティアの方で参加されていた、車いすに乗られている方が積極的に行われていた。洗濯昼食後まで広場に利用者が集まるので、そこで行っていた。

これらが、ボランティアの主な内容だった。

患者さんは、食事の後は、車いすでベッドまで連れていく方、一人で行く方などもいたが、中でも驚いたのが足が不自由な患者さんが腕の力だけを使って遠く離れたベッドまで這いずりながら行く患者さんもいた、手助けをしなければならない患者さんをスタッフに教えていただき、ベッドまで車いすに乗せて連れていく作業を行う。

12時近くになると患者さん、地元ボランティアスタッフが時間だから帰れと、手ぶりと言葉で伝えてくる。12時以降は現地ボランティアのみになり、門の外へ行かなくてはならない。

プレムダムの入り口





⑤ 【シュシュババン】 (syusyu bhawan)

6か所に分かれているマザーハウスの施設は一つ一つが距離があるがこのシュシュババンはマザー・テレサのミサの会場から北へ徒歩5分程度の場所にあった。その時のボランティアの人は10名ほど(女性に限られている)子どもたちと一緒に遊ぶことや食事介助が主だった。

ハンディキャップと養子縁組を待つ部門に分かれている孤児たちの施設。ハンディキャップの部門には脳性マヒ、知的障害、身体不自由児や結核などの一時的な病気にかかった子どもの預かり所にもなっています。

全ての子どもたちに障害があった。年齢は1歳に満たない子どもから12歳前後の子どもたちでワーカーと呼ばれる方と一緒に過ごしている。マザーが目指すものに自立があり、どんなに小さい子供たちも自分の食事は自分で食べるとうケアを実践してあった。

まず

1つ目 テーブルや椅子の工夫がされていて個別の車いすや安定しているテーブルが一つ一つ手作りで作ってある。

2つ目 食器の配慮がこぼれにくくされている。ステンレス製であること

3つ目 補助具がさらにその子の手に合ったスプーンを作っている事この3つが揃うことで1人での食事が可能になると実感する。

食事汁物とご飯は別に来るが食べる時はインド流でカレーの感じで一つの器に盛ってあることも一人で出来ることかもしれない。3人の食事の介助をしたがどの子も最後の一粒まできれいに食べる習慣がついていた。服薬などはどの子にも見られなかった。

一緒にボランティアをした看護大学の3年生(滋賀県)と議論をしたが激しく体を動かす子が2名の比較的小さい子の頭を殴るなどの行為があり、私が見ている感じでは「おしおきをする」意味でベッド柵に拘束をされたことでマザーハウスでも拘束があることに幻滅をしたとのことになったが今の時点ではこれが拘束にあたいするのかがどうか分からない。

1回の施設内のボランティアは15人以内になっている。

シュシュババンの前の通り 歩道にのり
出した気が印象的でした。

木



【平和の村 チタガール】

平和の村 チタガールはそもそも自立をしているところでボランティアは入出はしてなくて施設見学とのことでした。

マザーハウスのブラザー2名とドライバーさんがマザーハウスの救急車で案内をしてくれました。

「平和の村」はそもそも自立していて・働く場所・教育・自給自足などしっかりと出来ているところでインドコルカタで一番きれいな町でした。

1時間くらいかけて施設内を案内していただき ここは写真がOKなところでしたので100枚近くの写真を撮ってきました。

食料では 食肉(豚・マトン)などの育成 着るものは機織り サリーなどすべての機織り・包帯やガーゼ・シーツやなどもすべて機織りをされて200くらいの機織り機がありました。

素晴らしい村にただただ驚きでした。写真添付

【循環型社会にむけて】

東インドコルカタ 西ペンガル州ブッダビリール

標高 1500 メートル寒暖の差が激しい 日本から行くなら 11 月から 2 月が適している。

イギリスの植民地もともとカルカッタは植民地時代の地名で現在独立してからの名称がコルカタになっている。

コルカタは人口 449 万人の大都会 人口はインドで 7 位 1911 年に独立 3 つの漁村

コルカタはバングラデッシュからの移住者が多く バンシャープ人ビリール人マールーシャ人 中日人などあらゆる異なった出身者がいる。

犬・カラス・牛・人間がうまく共存している。 道は バス・車・人力車・リク車で常に満員午後からは動けなくなるほどの渋滞。

最初に驚くのは渋滞の車からなり続けるクラクションはまるで喧嘩をしているようで怒鳴り声もペンガル語で叫ばれる言葉にも驚かされる。

物乞いの方々が手をだしてされる姿にも驚かされるが ある間隔において路上で御座をかぶり寝ている姿にも驚く。

ニューマーケットも顔を出したが 日本のアメ横のようにびっしり露店が並び欲しいものは何でも買える庶民の市場だった。

しかし鶏肉・マトン・など冷蔵庫もないところでの販売が驚きの連続だった。

地下鉄が日本から導入されたみたいで メトロ地下鉄にものつたがいつの時間も超満員で身動きが取れなかった。コルカタの地下鉄はコインを買いコインを IC のところへタッチし乗りおるときにはコインをそのまま投入するやり方でした。

ガンジス川も体験 水浴びはもちろん 生活の排水として庶民の大きな力になっていた。